

二〇一七年五月二三日、日本学士院と本研究所の共催により、「日露関係史料をめぐる国際研究集会」を開催した。今回の研究集会は通算一七回目である。ロシア・サントペテルブルク市から、ロシア国立歴史文書館セルゲイ・チュエルニャフスキー館長、ロシア国立海軍文書館ワレンチン・スミルノフ館長、さらにロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所ワジム・クリモフ上級研究員を招聘して御報告をいただいた。第一報告では、クリモフ上級研究員から、ロシア国立古文書館（モスクワ）が所蔵するヤマトフこと橋耕斎による日本のキリシタン禁教に関するレポートについて報告された。このレポートは、一八六四年にアジア局長オステン・サケンへ提出されたものであった。第二報告は、スミルノフ館長から、一八六一年のボサードニク号事件の経緯を中心に、対馬に根拠地を求めたりハチョフ提督麾下のロシア海軍の動向が詳細に論じられ、関係史料を丹念に紹介していただいた。第三報告は、チュエルニャフスキー館長により、歴史文書館が所蔵する史料群から幕末期のロシア箱館領事館関係史料について報告していただいた。参加者は約六〇名。

この研究集会の実施にあたっては、クリモフ上級研究員から多大なるご尽力をたまわったことを付記して謝辞にかえたい。

（プロジェクト代表／保谷 徹）

日本のキリスト教に関するV・ヤマトフ（橋耕斎）の報告書

ワジム・クリモフ

一八六二年、最初の日本使節がロシア帝国の首都、サンクト・ペテルブルグに到着したことに関連して、【外務省】アジア局勤務の通訳である日本人橋耕斎に二個の報告書作成が委嘱された。⁽¹⁾

ひとつでは日本の皇帝による外国使節接受儀式の式次第が研究され、⁽²⁾

もうひとつはキリスト教について書かれたものである。後者はロシア国立古文書館【Российский государственный архив древних актов（略称はРГАДА）】のフォードル・ロマノヴィチ・オステン・サケン（一八三二—一九一六）のフォンド（Ф.1385, оп1, единица хранения № 920）に保管され、「日本のキリスト教に関するV・ヤマトフの報告書 草稿」と

題名をつけられている。一八六三年の日付付き。追記がある。「F・R・オステン・サケンが」一八六三年七月二四日著者より受け取る。⁽³⁾

草稿の最初には、報告書は「ウラ「ジミール」・ヤマトフが作成」とある。

本文を見る限り、文体的な訂正がなされており、ロシア人によって編集されたことは明らかである。しかし、疑いなく、すべては、橋耕斎の言葉で書かれており、彼が著者と考えられるだろう。

橋耕斎（一八二〇—一八八五）は立花久米蔵との名でも知られる。彼は遠江、掛川藩の武士である。橋耕斎は江戸に出て、そこで博打に興じ

たが、その後僧籍に入り、江戸（今日の東京）の池上本門寺の雑用掛の職務に従事していた。池上本門寺は日蓮宗派に属する。だが耕斎は、日々の変哲のない生活に我慢が出来ず、諸国放浪の旅に出た。

『大日本人名辞書』では、橋耕斎について、「畸人」（変人の意味）、「怪僧」（怪しい僧侶）、「悪漢」（ごろつき、悪人の意味）との芳しくない記述がある。⁽⁴⁾一八五五年（安政二年）、橋耕斎は伊豆半島戸田村で、同地に伯爵エヴフイミイ・ヴァシリエヴィチ・プチャーチン（一八〇四—一八八三）を団長とするロシア使節団が滞在していた際、第一次日露条約締結で通訳を務めたイオシツプ（オシツプ）・アトンノヴィチ・ゴシケーヴィチ（一八一四—一八七五）と知り合いになる。ガリーナ・ドミートリエヴナ・イワノヴァ（一九二七—一九九九）はアンドレイ・アンドレイヴィチ・バビンツェフ（一九二〇—一九八三）に従い、橋耕斎はキリスト教会に属していることにより死罪の恐れが出て、下田湾に碇泊中のロシア船に泳ぎ着き、ロシア艦の乗員に庇護されたと報告している。⁽⁵⁾だが、実際には、彼とロシア人たちの出合いは、違うものであった。詳細に関しては、中村喜和教授が充実した内容の論文で述べている。⁽⁶⁾

ここでは、橋耕斎が死の危険が迫っていた日本をロシア使節団の一部と共に後にすることに成功したのは、とりわけI・A・ゴシケーヴィチの支援があったということだけを指摘しておくことにする。

一八五六年、耕斎は、ゴシケーヴィチも勤務するロシア外務省アジア局の日本語通訳に登録された。一八五七年、I・A・ゴシケーヴィチは、「日本人橋耕斎の協力を得て、日露辞典を刊行し」、⁽⁷⁾学界の好評とデミドフ賞【多額の寄付をしたシベリアの豪商デミドフにちなんで設置された賞】を得た。

一八五八年一月二日ヴァシーリエフスキー島ヴラゴヴェシチェンスカヤ教会【日本語では生神女福音教会とも。他派キリスト教では聖母愛

胎告知教会のこと】、「マラーヤ・ペルシユペクチャーヴナヤ通り先七—八号線間」で、三八歳の橋耕斎は受洗し、ウラジミールという名とヤマトフとの姓を賜った。

ヤマトフの姓は、日本の古代の名称のひとつである大和という地名に「夫」（意味は夫、男）というひとつの漢字を加えて作られた。

こうしてロシア語では *Yamtoff* というヤマトフの姓が出来たわけであるが、おそらく、大部分のロシア人にとっては、「大和から来た男」、すなわち「日本から来た男」というのは、要するに、「日本出身の男」で、あるいは単に「日本人」を意味するということを「読み取る」ことはおそらくできなかつたはずである。

サンクト・ペテルブルグで、橋耕斎はロシア正教徒になった。一八五八年一月二三日の新聞「北方の蜜蜂」紙は次のように報じた。

「二月二日、ヴァシーリエフスキー島のヴラゴヴェシチェンスカヤ教会で、日本語辞書刊行において「ゴシケーヴィチ」氏の有名な協力者であった日本人橋耕斎が聖なる洗礼を受けた。新たな受洗者はウラジミール・スタニスラヴィチという名前を与えられ、「日本の」【ヤマトフ（ヤマトの）という】という姓が創られた。この生粋の日本人は、現在全ロシアでおそらく唯一の日本出身者であろう。祖国で彼は僧であったが、日本語教師としてプチャーチン伯爵の使節団にうるさく付きまとうようになり、ロシアに行くことに同意し、さらには、ロシア人と共にイギリス人の捕虜となった。その後一行は世界を巡りサンクト・ペテルブルグに帰着した。その日本人は我が国の国籍を得て、ロシア語で話す力を相当地に付けた。彼は自分の国の言葉を良く知り、中国語【漢字】を見事に書き、祖国の文学に通じ、総じて知的好奇心を備えた人物である。我が国と日本との【外交】関係が生じつつある今、大学に日本語科を設置することは極めて有益なことであろう」⁽⁸⁾

ところで、かつて一七五三年、同教会の教区信徒の中に、ロシアの学者であるミハイル・ヴァシリーエヴィチ・ロモノソフがいた。一七三八年に開基された教会付属墓地には、一八世紀半ば、旅行家でカムチャツカ探検家スチエパン・ペトロヴィチ・クラシエニンニコフ（一七一―一七五五）、アカデミー会員アンドレイ・コンスタンチノヴィチ・ナルトフ（一六八〇―一七五六）が埋葬されている。

現在、墓地のあった場所は小さな公園になっている。最初の日本使節団が来露した年である一八六二年の九月一日、ヴラゴヴェシチエンスカヤ教会付属に「教区貧者援護協会」が設立された。ヤマトフはロシア女性と結婚し、ロシアで二人の子供をもうけた。一八七〇―一八七四年橘耕齋はサント・ペテルブルグ大学で日本語を教えた。一八七三年訪露中の使節団長である岩倉具視（一八二五―一八八三）の勧めで、一八七四年橘耕齋は日本に帰国した。橘耕齋は姓と以前の音は残しながらも名前の最初の一漢字を改め、増田甲齋と改名した。当時、徳川將軍家の墓所がいくつもある名高い寺である芝増上寺（今日の東京都港区）で隠者の庵を結んでいた。増田自身は格式の高い東京・白金にある源昌寺に葬られた。

「報告書」はロシアの優れた外交官のひとりであり、東アジア諸国の専門家であるフォードル・ロマノヴィチ・オステン・サケン男爵に提出が予定された。おそらく、オステン・サケンが「注文主」であった公算が大きい。ロシア国立古文書館 (РГИА) にある男爵のフォンドから判断するに、男爵は東アジアの様々な諸国でのキリスト教信仰の状況とキリスト教徒の状態に興味を持っていたらしい。東アジア諸国におけるこの問題の研究は、職務と個人的興味の両方に関わるものと思われる。

おそらく、「注文主」自身のことを述べるのは、余計なことではあるまい。男爵フォードル・ロマノヴィチ・オステン・サケン（一

八三二―一九一六、レイノルド・フリードリッヒ・フォン・デア・オステン・ザークン Reinhold Friedrich von der Osten-Saken）はロマン・フォードロヴィチ・オステン・サケン男爵（一七九一―一八六四）の子息である。フォードル・ロマノヴィチ・オステン・サケン男爵の外務省での仕事は、様々な点で、リヴランド【バルト海沿岸】からサント・ペテルブルグに来た父ロマン・フォードロヴィチ・オステン・サケン男爵の業績を追っていた。¹⁰⁾

父ロマン・フォードロヴィチ・オステン・サケン男爵は外務省の記録掛からそのキャリアを始めたが、七年後の一八二〇年ロンドン大使館の書記官に任命され、後には、さまざまな特殊任務を遂行した。一八三五年、省の上級顧問官に任命され、伯爵カール・ヴァリーリエヴィチ・ネツセリローデ (Karl Robert von Nesselrode) カール・ロベルト・フォン・ネツセリローデ、一七八〇―一八六二) の顧問官のひとりとなった。一八五六年父ロマン・フォードロヴィチ・オステン・サケン男爵は、アレクサンドル・ネフスキー勳章を受章し、一八六三年二等文官の地位を賜った。同様に、外務省参議会のメンバーに任命された。¹¹⁾ イギリスの画家ドー【George Dawe (一七八一―一八二九)】の描いた彼の肖像画は冬宮の一八二二年ギャラリーにある。

父ロマン・フォードロヴィチ・オステン・サケンは、オステン・サケン家という大きな栄誉ある一族の一員であるが、同一族は、ボメラニア、リヴォニア、クルリヤンシア出身のロシアに帰化したドイツ人で、ピョートル大帝の時代から、皆、例外なく、信頼と正義をもって勤務した。

フォードル・ロマノヴィチ・オステン・サケンは父の例にならった。彼はサント・ペテルブルグの有名な学校であるペトリシユール（ドイツ語では St. Petri-Schule で一八四六年から一八四九年まで在籍した）を卒業し、サント・ペテルブルグ帝国大学法学部で高等教育を受け、外

務省アジア局に奉職した。オステーンサケン男爵は中国、セイロン島を訪れ、そのことに関する報告をロシア帝国地理学協会で行った。⁽¹²⁾

一八六七年フョードル・ロマノヴィチ・オステーンサケンは天山山脈南部までの中央アジア行きを敢行し、ナルイン地方、チャティル・クリ湖【ナルイン地方、チャティル・クリ湖も現キルギス共和国内、当時は清国領。前者は天山山脈の北側、後者はその南方】、そして、ほとんどカシユガルまで、到達した。⁽¹³⁾

一八七〇年に刊行された中央アジアのイシク・クリ湖に関する研究への広汎な註は彼の手になるものである。一八七二年オステーンサケン男爵はロシアの民族誌学地図の刊行に手腕を発揮した。

一方、一八九〇年、気象学の諸問題を明らかにしたロシア地理学協会付属出版の創設を請願した。フョードル・ロマノヴィチ・オステーンサケンは、一度ならず、ロシア地理学協会の事務長、支部長、代表代行の責務を引き受けたが、実際の学問的、および、政治的活動から離れた後は、地理学協会の名誉会員であった。それ以外に、「ロシア帝国地理学協会報」の名で学問界で広く知られたところの、総合地理学、民族誌学、統計学の論集の編集長を務めた。彼の編集の下に第一巻から第七巻の全七巻が世に出た。⁽¹⁴⁾

外務省アジア局での外交官勤務の際には、一度ならず、重要問題をこなした。なかんずく、一八六二年初めてサンクト・ペテルブルグを訪問した日本使節団の同行で、ベルリンに差遣された。一八七〇—一八九七年フョードル・ロマノヴィチ・オステーンサケンは外務省國務関係課長であった。オステーンサケンは多くの重要な文学作品の出版に有能な力を発揮した。オステーンサケンの助力の下、一八八〇年、アドリフ・エリック・ノルデンシエリド（スウェーデン語では Nils Adolf Erik Norden-skiöld、一八三二—一九〇一）の北極探検の論文著作が出版され、また、

一八八一年と一八八三年には、『ロシア北部に関する問題考察のための資料』【“Материалы для разбора вопроса, касающаго Севера России”】が刊行された。

フョードル・ロマノヴィチ・オステーンサケンはサンクト・ペテルブルグで他界し、スモレンスキー・ルーテル派墓地に埋葬された。以上の短い略歴記述だけでも彼の人物の大きさが容易に分かるであろう。今度はオステーンサケン男爵に提出された「報告書」本文の分析を試みよう。

「報告書」では、キリスト教の教義は「転び、バテレン、イルマン」の三つの名前と呼ばれると伝えられている。⁽¹⁶⁾ロシア人編集者は上記の専門語間の違いを理解することは、おそらく、ほとんどできなかったのだろう。それどころか、橋本斎自身が、その例外ではなく、「報告書」にこの点に関して明らかにしていない以上、明らかに、その間に大きな違いを見ていないのだろう。

日本語文献で、バテレンと片仮名書きされても、漢字で「伴天連」と書かれても、ポルトガル語で *parte*、パードレと書かれているのが、まず第一義的には、ポルトガル人のカトリック宣教師のことである。後にはスペイン人やイタリア人の宣教師、そして、イエズス会の宣教師のことも指すようにはなる。後になると、キリスト教やキリスト教徒をもこの名で呼ぶようになる。「転び」とは転びバテレンの略語で、キリスト教を棄教し、幕府権力に対する協力者たる道を選んだ神父、聖職者、修道士、すなわち、背教宣教師、「墮ちた宣教師」を意味するのに用いられる。キリスト教の教えを棄教した信者も「転び者」と呼ばれる。キリスト教を棄教した聖職者、修道士、信者は、仏【**複教**】と神道の神々の前で、書面で自己の棄教を証言する。この文書は「転び証文」（キリスト教を棄教した書き証文のこと）、あるいは「改心誓詞」（信仰放棄の誓詞のこ

と)と呼ばれる。「イルマン」という言葉は、やはりポルトガル語の「Imao」からの造語で、兄弟、すなわち、カトリック修道士、修道兄弟者を意味する。日本人は、漢字三文字で「伊留満」(読みは「イルマン」と表記する)。

この後、ヤマトフは、天草島でのキリスト教徒の蜂起について知らせている。ところで【橘耕齋の「報告書」では】地名はAmacca [Amaksa]と書かれ、子音kの後が弱母音化されているが、この地名は、天草であるのだから、Amacca [Amaksa]ではなく、Amayca [Amakusa]と表記した方がよい。

橘耕齋は天草島、およびその周辺で、キリスト教の布教に大きな役割を果たしたのは、森宗意軒であると伝えている。

「天草島の医師・森宗意軒は民衆にキリスト教を布教し始めた最初の人間である。中には、この宗教のせいで争いが起きたり、争いの最中にたまたま殺人事件でも起きれば、この宗教のせいだと思っている人たちがいた。藩の役人たちは、争いをさばかなくてはならないが、その際は、いつもキリスト教に帰依した者たちに嫌疑がかけられた。民衆の間へのキリスト教の伝播は、医師・森宗意軒により起こされた奇跡がさらに強めた。争いが再び始まり、代々の大名たちによるキリスト教徒迫害にもかかわらず、キリスト教は広まり、天草島の大名は幕府に助けを求めなくてはならなくなった。キリスト教徒たちは、幕府と自分たちの大名の連合軍が、自分たちを追討するために、迫っていることを知ると、山に退去し、立てこもった」¹⁷⁾

蜂起した者たちは死に物狂いで抵抗した。だが、武力は等しくない。「幕府軍に大名軍が加わった。包囲は一年続いた。キリスト教徒たちは屈しない。生き残った者たちの食料は尽きた。その時始めて、命を捨てることを決めた。だが、包囲に屈したわけではない。山から海に、断

崖で身を投げた。生き残った者たちは、幕府軍の指揮官である大臣に、彼らをキリスト教に改宗させたのは医師・森宗意軒であり、自ら命を犠牲にした「血まみれで死ぬ」者のみ救われ聖者になる、と森宗意軒が教えたのだ、それゆえ、包囲されたキリスト教徒たちは、様々な手段で自らの死を選び、屈しないのだと、宣言した」¹⁸⁾

蜂起者たちは当局への自分たちの抵抗を森宗意軒に対する恐れでもって説明した。

包囲で生き残ったキリスト教徒たちは次のように言った。

「われらは医師・森宗意軒の教え(つまり、キリスト教)を受け入れたが、それは、ただ、殺されることを恐れたからである。その宗意軒はキリスト教に入信しない者が一人でもいるとその家族全員を焼き殺した。これを聞くと、幕府軍の指揮官である大臣は、キリスト教徒の間にも森宗意軒の教えを強制されたから受け入れた者たちがいると考え、キリスト教徒ではない者を処罰するのは望むところではないとし、キリスト教徒たちが崇拜する絵を踏むことで調べる特別な方法を考案した。絵踏みをした者は、キリスト教徒であることを認めなかったということになり、解放された」¹⁹⁾

ここで言及のある特別検査とは、聖像、すなわち、通常、キリストを抱いた聖母マリア像を踏まなくてはならない検査のことである。

日本の歴史では、この儀式は踏み絵【絵踏み】と呼ばれる(文字通り、足で絵を踏むこと。すなわち、キリスト教徒にとり聖なる像を踏むこと)。

ヤマトフが語っているモリ・ソウキエン【ソウイクエン】とは森宗意軒のことである。その父は西村孫兵衛(彼は森長意軒)である。森は一六〇〇年の関ヶ原の戦いに敗北した後処刑された吉利支丹大名である小西行長(一五五八―一六〇〇)に仕えた。蜂起の先導者の中で最も有名な人物は天草四郎(一六二一―一六三八)である。本名は益田時貞。キ

リスト教徒である。乱の指導者とされている。

九十日間の包圍の末、原城は強襲され、防御していた者たちはすべて、殺された。その中には、年若き益田時貞自身もいる。しかしながら、なぜ、本文のロシア人編者たちが、リスト教徒軍の司令官が医師・森宗意軒だとしたのか、天草、島原で起きた蜂起の全指導者の中で、なぜ森宗意軒だけに言及したのかは判らない。

さらに草稿の中でヤマトフは以下のように伝える。

「一六四〇年、リスト教を邪悪な力により導かれた邪教として改宗を禁じる法が出された。それに反し入信した者たちは、以後、皆罰せられた。それとともに、外国船は、外国人（オランダ人）が割り当てられた [Jesuita [Dezima] と名付けられた] 今日表記では [Jesuita [Dezima]、クリモフ注] 小さな地所（小島）がある長崎以外のいかなる港にも入港することを禁じられた。幕府はオランダ人がリスト教を布教することを恐れるとともに、オランダ人が地元民と親しくなることがないよう、見張りに伴われず、自由に町を歩き回ることを禁じた。」⁽²⁰⁾

おそらく、ウラジミール・ヤマトフは一六三九年の日本の諸港にポルトガル船の来航を禁止した法令を指しているのだろう。三ヶ条からなる法は「寛永十六年の鎖国令」と名付けられている。この処置は多くの点において、リスト教宣教師団が非合法に来日するという恐れからとられたものである。⁽²¹⁾

この点に関連して、ヤマトフは、自分たちはリスト教徒ではないとの証拠を提出する羽目になったオランダ人たちに興味深い事実を伝えている。

「天草島のリスト教徒に対して試して判ったように、リスト教徒たちは自分たちが崇拜する絵を決して踏まないということによってのみ判明する、リスト教を信仰する者と信仰していない者とを本当に区別

するための手段は、リスト教に入信したこの島の住民たちに対して最初に示された。そのような手段が正義であるかどうかはとにかくとして、日本政府は、長崎に来航するすべての艦船のオランダ人に絵踏みをするように要求した。新しい条約により、この件が廃止される一八五九年まで続いたこの要求をオランダ人がいかに嬉々として受け入れたかは、よく知られている。ウラジミール・ヤマトフが考えているように、リスト教徒が足を踏むことを強要された絵は、リスト教徒にとりならかの聖なる像ではなく、もっと、別の、リスト教徒の信条に反しないもので、それゆえに、オランダ人は日本政府のそのような要求を喜んで受け入れたであろう。像は馬の頭をしていたとのことである。」⁽²²⁾

オランダ人は聖像ではなく馬の頭の像を踏んだのだとの情報がどれだけ信憑性のあるものかは、判断できない。この情報は他の史料から再検証すべきであろう。

さらに、「報告書」で橋耕斎は一六五一年の江戸での叛乱について、次のように記している。

「一六五一年（露曆に換算したもの）、天草島の宗教蜂起とは無関係に、江戸で、由比正雪が起こした乱があった。由比正雪は当時、軍学を知り、剣術指南の教育者として見做され、多くの弟子たちがいた。自己の名声と民衆の尊敬に驕慢になり、由比正雪は政権の転覆を図り、幾人かの大名を説得するため、軍を集め、將軍にまで登ることを望んだ。將軍を討つた後、大名の一人を最高位に付け、自身は第一の高官になり、その後は、自分が担ぎ上げた大名も討ち、自身で將軍になるつもりであった。大名の大部分は將軍のお膝元、首都におり、由比正雪は自分の計画を伝える相手がいなかったため、紀州公の名前⁽²³⁾で、軍隊を集めるという偽の命令を各所に送った。江戸に行く予定であった軍の一部に関しては、由比正雪は弟子の丸橋忠弥に指揮を任せ、正雪自身は、駿河の府中に向かった。」⁽²⁴⁾

この命令は成功しなかった。丸橋忠弥は由比正雪に何度も資金を送るよう求めた。だが、受け取ったのは、ただ、丸橋忠弥を安堵させるための諾との返事だけであった。このため、丸橋忠弥は、資金供給に関しある商人に頼まなければならなくなった。丸橋忠弥の求めを実行すると約束した商人は、その一方で、丸橋の企てを幕府に通報した⁽²⁵⁾。

ヤマトフが報告書の中で伝えた情報の再検討の際、大きな困難となっているのは、日本の固有名詞の転写表記、特に、漢字が書かれていない場合である。例えば、報告書中の表記である「Omnoocou [ushooseis]」は、通常の専門的日本学者に受け入れられている転写法では「On Cécany [ui Sioseisu]」と発音するはずであるから、由比正雪（一六〇五—一六五一）である。由比は姓、漢字二字で由井とも書くが、この場合でも発音は同じである。正雪は雅号（号）で、本名は正真、正之という名でも知られている。その際、後者の名の発音はロシア人にとって前者「シヨーンシン」とはまったく異なる。つまり、最初の漢字は同一だが、ただ前者の場合は中国語からの借用である音読みである。類似の説明はロシアやヨーロッパの伝統で教育された者には必須である。彼は牢人である。つまり、主君のいない武士、領主ない侍である。由比正雪は軍学に通じていた。

丸橋忠弥、姓は丸橋、名は忠弥、報告書では「Mapyōacu Yya [Marubasi Chuya]」と書かれているが、エヴゲエニイ・ドミートリエヴィチ・ポリヴァノフ（一八九一—一九三八）の転写方式に則って「Mapyōacu Tox [Marubasi Tjuya]」と書くべきである。ヤマトフは報告書ではどこにも漢字を書いていない。そのため、人物特定の問題が錯綜している。マルバシ・チュウヤ、漢字では丸橋忠弥（？—一六五一）は、牢人である。そして、慶安年間に起こった騒乱、すなわち、慶安事件の積極的な参加者の一人であった。丸橋忠弥は御茶ノ水で宝蔵院流鎗術の道場を開

いた。

宝蔵院流とは、奈良の興福寺の僧院である宝蔵院から名付けられた。その興福寺の僧、宝蔵院覚禪房法印胤栄（一五二一—一六〇七）が創始したとされているため、宝蔵院流と称される。

この乱は日本史では慶安事件、慶安の変、由比正雪の乱の名で知られている。

陰謀者たちの立てた計画は次の通りである。

(一) 企ての指揮官である由比正雪は、駿河国「今日の静岡県の一部」久能山にある徳川家の金庫倉を襲撃し、それを確保したら、その直後に、駿府城を奪取しなくてはならない。

(二) 由比正雪の指揮下に置かれた丸橋忠弥は、江戸中いたるところで火事を起こし、水道システムの水に毒を入れ、その後、そのパニックと混乱を利用し、あたかも紀州徳川家の名で行動しているかのように宣言した後、江戸城支配地に進入し、江戸城を奪取しなくてはならない「紀州とは紀伊国の名称のひとつ、別称紀州。徳川御三家のひとつとして知られ、紀伊と伊勢国の一部を領する。五五万五千石」。

(三) 京都と大坂の謀反者たちは、至るところで火を放ち、無秩序状態を引き起こすことになっていた。

由比正雪は和暦七月二二日江戸を発ち、駿府に向かった。二五日駿河の城下に着き、宿屋・梅屋に投宿した。陰謀が露見したのはすでに二三日、由比正雪が江戸を発った次の日であった。駿府町奉行が陰謀の指導者の逗留先情報を得るや、宿屋を幕府に忠誠な軍勢が取り囲んだ。由比正雪と彼と共に行動した七人は自刃することで生涯を閉じた。

由比正雪は遺言を残したが、そこには乱を起こそうとした理由が述べられていた。由比正雪の狙いは、天下の騒動や動乱ではなく、牢人のお

かれた極度に過酷な惨状に最高権力である幕府が目を向けて欲しかったのである。一七世紀初頭の政争と徳川幕府に従わず、反抗した大名の減封・改易による大名領の減少の結果、浪々した人々はひたすら貧困化したのだ。このように、日本では、仕官の道を失い、幕府の支配に不満を持つようになった武士が激増した。

当時、突然主君を失い、それと同時に生活の手段を失った武士は、国中で、三〇万人から四〇万人にも上った。問題の深刻さは、慶安の変に二千人もの牢人が参加した事実ひとつでも判るだろう。この由比正雪の蜂起は、その遺言書に弁明されている通り、天下の正当な政治、すなわち「天下の正道」への幕府の転換を志向するものであった。

江戸では、現在の品川区の南部にある鈴ヶ森（品川鈴ヶ森）が罪人の刑場であった。そこに和暦八月一日、約三五人の謀反者が苦痛に満ちた死に方に処せられたのである。彼らは十字架、つまり、磔柱にかけられた（磔、磔刑）²⁶。

乱の後、由比正雪と丸橋忠弥は文学作品や芝居の主人公になった。

一六八〇年、都市では、由比正雪の手記（『油井根元記』）が民衆の間に流行った。これに驚いた幕府は人気の出た作品の流布を禁ずる処置に出た。後に、江戸時代半ばになると、『慶安太平記』が現われた。作品の内容は口から口へと伝えられ、歌舞伎「樟紀流花見幕張」の名で人気を博した。作者は河竹黙阿弥（一八一六—一八九三）。『慶安太平記』は「樟紀流花見幕張」の通称）戯曲は一八七〇年に書かれた。戯曲以前に芝居「けいせい富士見ル血文」【歌舞伎・浄瑠璃外題】²⁸が流行った（一七五二年成立）。由比正雪については、中でも、新井白石がその著書『平家物語評判』に記している。

それゆえ、橋耕斎が一六五一年の出来事について知ったのは、当時人気の芸術作品からであったと言えるだろう。橋耕斎は、由比正雪が青年

時代あたかも森宗意軒のところで学び、「たくさんの奇跡を起こすことができた」との根拠の上に、これらの出来事を天草におけるキリスト教徒の複数の蜂起と芸術的にひとまとめにしようとして試みているように思える。とりわけ、橋耕斎の「報告書」の中では、次のように述べられている。「日本の民衆は、現在に至るまで、由比正雪の叛乱の試みをキリスト教徒の蜂起に帰しており、日本人の考えではキリスト教徒のみが可能な様々な種類の奇跡を起こせる技能を由比正雪が持っていたということがその根拠に置かれている。

由比正雪はその青年時代、日本の様々な都市を訪れており、天草島にも行ったことがある。そこで森宗意軒のところでは学び（天草島でのキリスト教の初めての伝道は森宗意軒が行ったとされている）、多種多様な魔術を知っている。このことに関して由比正雪は、誰にも言明していない」²⁹。現代のロシアの日本史に関する教科書の中で「慶安年間の騒乱」に割られているのはわずか一節に過ぎず、ここでは、文字通り次のように述べられている、と指摘することは興味深い。

「徳川家光は突然死去し、日本国内に紛乱が起きた。牢人（主君を失い、その結果、生存の手段をなくした武士）たちがこれを利用した。彼らは、新しい將軍を殺し、天皇を誘拐し、徳川処罰に関する法令を出させようと目論んだ。陰謀者たちは、外様大名たちが国権を奪取することを望んだ。内戦が始まれば、そこに牢人たちが活路を得られる。戦が牢人らの主要な職業であるからである。だが、幕府は乱の鎮圧に成功した」³⁰。

ここでは、細部には触れず、本質に対する批判的見解も表明することはず、陰謀の首謀者の名は上げられていないことのみを指摘するに留める。

これに対して、ヴァシーリイ・ヤコヴレヴィチ・コストイリヨフ（一八四八—一九一八）によって書かれ、一八八八年に出版された『日本史

概説』【“Очерке истории Японии”】では、慶安年間の陰謀の説明にはるかに多くの紙面が割かれ、主な陰謀者の名が挙げられ、彼らの目的も明確に記されている。

とりわけ、次のように、記されている。

「駿河国の住民である由比正雪某は極めて能力のある人間で、秀吉に關する話をたくさん読んでおり、彼自身も、日本中を完全に屈服させることができる、という結論に達し、日本を制圧することを決意した。

：天皇の名で行動する可能性を有するために、由比正雪は、かつて天皇を支持して、そのために行動した、あの楠木正成の末裔であると名乗った。天皇の名を利用する権利を得るために、由比正雪は江戸で楠木流劍術の師範である英雄・楠木正成の本当の末裔と近づき、日本の習慣に従いその養子となり、彼と一緒に最初は劍術の稽古と学問の修練にいそしんだ。由比正雪のもとには弟子が多く集まった。由比正雪は彼らの上に立ち、牢人を自分の周りに集め、魅了するようになった。：由比正雪は、着々と弓矢や他の武器を準備し、自分の目的のために、三千人の者たちを味方に付けることができるようになった。由比正雪のもとで学んでいた者たちの中に丸橋忠弥がいた。丸橋忠弥は、有名な日本の家柄である長宗我部（原本は綴りが「ツェ・ソ・カベ」と記されている。クリモフ注）の末裔である【長宗我部盛親の側室の子という説がある】。

由比正雪は丸橋忠弥と親しくなり、盟を結び、計画を伝え、加勢するとの約束を得た。その際、由比正雪は、徳川家の一族、紀伊の大名、頼宣が、自分たちを助け、金や必要なすべてを援助してくれると示唆した。一六五一年六月一日、由比正雪の追隨者たちは協議のために街の外に集まり、蜂起の際に抵抗する者に対抗する者を割り振った。…この後、まもなく、彼らは各々今後の行動の持ち場所に向かった。

丸橋忠弥はこれからの行動のための十分な資金がなく、そのため、大

坂のひとりの商人のところで借りた。蜂起の始まりは遅れた。借金の返済の時期が来た時、払うものは何もない。商人に借金の返済を待つてくれるように説得しながら、これから先に予定されている蜂起について、商人に語った。商人はただちに幕府の役人に通報した。丸橋忠弥は捕らえられた。由比正雪は自分に従う者たちを放したが、十人の追隨者たちは由比正雪から離れなかった。屈辱的な死罪から逃れるため、由比正雪はこの者たちとともに、自害した」

上記の出来事について本の中で再構成されていることはヤマトフの「報告書」の中で叙述されているものに大変近い。V・コストイリヨフはヤマトフの「報告書」を知っていたとの印象を受ける（コストイリヨフは外務省に勤務しており、ロシア外務省のアルヒーフや外務省アジア局の書庫に保存されている文書群にアクセスすることができたものと考えなければならぬ）。あるいは、コストイリヨフは、ヤマトフが使用したと同じ情報源を用いたのかもしれない。

残念ながら、本の中でこのロシア人著者は、現代ではきまりとなつていのように、利用した文献の典拠を記すということをしていない。

ヤマトフは由比正雪が行った奇跡、魔術を記している。夏の暑い日、由比正雪は秘密の呪文を唱え、水の入った桶を空中に持ち上げ、桶を雪でいっぱいにして下ろした。呪文の助けを借り、一門の長に自分の尋常ではない能力を見せ付け、懐から二羽の鳩を出現させ、その後、また、懐に戻した。由比正雪は「大気現象により」江戸から西の方で蜂起が起きると予言することができた。「実際に、次の年、天草島でキリスト教徒の蜂起が起きた」。再び「大気現象により」多くの建物を焼いた火事を予言した。

「日本の書物には、由比正雪の行為について多くのことが書かれているが、それらの行為はすべて、由比正雪の知る妖術とされている。由比

正雪が、彼の経歴が載っている諸本に書かれている通り、諸大名参加の上での幕府転覆という自分の試みに成功しなかったとしても、そのことは、大君という当時の支配者が、その徳行ゆえに民衆や大名たちに愛されていかどうかということとは別の話である。³⁴」

ヤマトフは日本のキリスト教の状態について語りながら、直接とは言わないまでも、間接的に、由比正雪の蜂起と魔術への才能をキリスト教と結びつけている。しかしながら、牢人の蜂起をキリスト教徒の行動と同じものと真剣に見る十分な根拠はないように思える。なかんずく、丸橋忠弥は尋問の際、キリスト教徒と関係があるのかとの尋問に対して、はつきりと否との返答をしている。丸橋忠弥は、自分は、生涯、儒者・熊沢蕃山（一六一九—一六九一）の教えに従ってきたのであり、キリスト教の教えに従ったことは皆無であると答えている。³⁵

さらに、ヤマトフは、同様に、間接的ながら、キリスト教の禁止とキリスト教徒の弾圧を絡めながら、別のテーマへ移った。

ヤマトフは「報告書」の中で次のように報告している。

「一六六六年、都江戸の近く、最初の宿場、品川と二番目の宿場、川崎の間、池上村で、仏教寺院である本門寺が焼けた。この寺の貫首ニツツウ【日樹】は各地から仏堂【Kampania 大堂】修繕のために寄付を集め、村人たちには、木材を寄進するよう求めたところ、多くの者たちが賛同した。」

さらに、ヤマトフは、日樹が妖術の力を借り、寺を建てるために海岸で集めた木材を、海に流れ込む小さないくつもの川を通して流すことができた、と記している。

建築材は皆、長いこと海水に漬かり、水分を含んでいたにもかかわらず、「よく分からない理由により」、ことごとく、焼け尽きた。僧たちの耳の入ると動揺がおき、彼らは、日樹に起きたことの説明を求めた。

「この件の詮議は三、四ヶ月続いた。なんら、明白な証拠もないまま、日樹が妖術を使ったとも断定できず、仏法では、僧は他から何ものをも受けず、他に何も与えない、それゆえ、今後はあのように行動すべきであると、最後に日樹が言明したのみで会は終わった。だが、他の仏僧たちは、これに、納得せず、一件は国家会議の吟味に付された。国家会議は日樹の建議をよしとせず、寺が、他から寄進を受けたり、他に何かを寄進することを禁じることに同意せず、日樹の一門、あるいは、一族は、全員、江戸、大坂、京都から追放することを決定した」³⁶

ヤマトフが語ったことを分析しよう。話は本門寺（Хомондзи и Хомондзи）についてであるが（「報告書」に書かれている「Хомондзи【Khomonchizi】」では綴りが違う）、この本門寺とは、その名前を冠された仏教宗派【つまり、日蓮宗】の創始者である日蓮（一二二—一二八二）入滅の地に建てられた寺である。

寺の主たる建物、伽藍の建立は、一三二七年、後継者であり、日蓮の本弟子（六老僧³⁷）の一人である貫首日朗（一二四五—一三二〇）の指導の下、池上でなされた。このため、寺は池上本門寺と称され、日蓮宗の四流派のひとつ、法華宗のひとつである。

「報告書」には、一六六六年に起きた大伽藍等の焼失火事について語られている。しかし、寺焼失の大火事は、現存の史料によれば、一七一〇年に起きている。その時焼失した池上本門寺は、第八代將軍徳川吉宗（一六八四—一七五二）の時に再興された。吉宗は紀州藩第二代藩主である徳川光貞の第四子である。

ヤマトフの語るところでは、寺の再建を指揮したのはニツツウという名の貫首であり、ニツツウは「キリスト教の妖術」の疑いをかけられたそうである。ニツツウには固く守っている原則があり、それは、仏法で言うところの「僧は他の者から何も受け取らず、他の者に何も与えるべきで

ない」という原則であったという。(おそらく仏教用語の「不受不施義」をこのように言い表したのであろう)。言わんとするところは、どうやら、宗派の信徒でない者からは何も取らず、また彼らには何も与えない、ということであるらしい。最後の状況は判断するのに適当な材料であるため、ここで述べられているのは、本門寺の第一六代貫首の日樹(一五七四—一六三一)のことであろう、と確信を持って言うことが出来る。³⁸⁾一六三〇年、江戸城で幕府の命令で討論が行われ【身池対論】、そこで勝利者と認められたのは、寺は布施を受け取ることができるとする立場を擁護した日乾(一五六〇—一六三五)と日遠(一五七二—一六四二)であった【受布施派】。この論争で敗北した日樹は、信濃伊奈に流され、その地で翌年死去した。

もし我々が、日樹と日乾との間に起こった論争が実際にあったということ的前提とし、対論者の名前を(キリール文字による日本語転写の規則がまだ定まっていなかったことを考慮し)ニツツウではなくニチジュと見なすことが正しければ、ヤマトフが引き合いにしている出来事の年代と本稿筆者による年代とは、明らかに合致していないと言うことができる。

ここで生じる疑問は、なぜヤマトフは、他宗派の信仰者からは何も受け取らない、彼らには何も与えないという原則を掲げた日奥(一五六五—一六七〇)より後の時代の論争についてではなく、ずっと早い時期のこの論争について語っているのか、ということである。

徳川家康は日奥と彼の論敵たちを呼び寄せ論争を行わせたが、その結果、負けと判定されたのは日奥であった。彼は流刑に処せられたが、一六二二年に京都に戻り、そこで論敵たちを批判し続けた。一六九一年、幕府は最終的に、日奥の考え方に与する日蓮宗の信徒たちは法を逸脱したものと認定を下した。しかしながら、この流派の流れは、非合法的な

かたちで存在し続け、日蓮宗のこの流派に対する禁制が解かれた一八七六年にその姿を現した。このことに関する情報は、ロシア外務省の職員にとつて極めて現実的なものであったにもかかわらず、ヤマトフは問題の本質を彼らに報告することができず、また、キリスト教はもちろん、一連の仏教宗派の禁令も含めて、これに関する、重要な当面の緊急課題を外務省職員に説明することも出来なかった。おそらく、ヤマトフは、

「縁なき者からの」布施は受け取らない、与えない」という原則(不受不施義)を初めて定式化した日奥については、何も知らなかったのであろう。日奥が発点となり、日蓮宗は、その原則を支持する者とそうでない者の二つの流れに分裂していった。だが、いったいなぜ、ヤマトフは他ならぬ本門寺の僧侶たちの分裂と論争について話しているのか、という疑問も生じる。そのことは橘耕斎の経歴の中に記されている事柄、すなわち彼は江戸から遠くない池上の地にある日蓮宗本門寺(池上本門寺)³⁹⁾で人生の一時期を過ごしたということにより、すべて説明がつく。彼はおそらくそこで「報告書」で述べているこの知識を得たのであろう。日樹についてのヤマトフの話もそのことによって説明がつく。どうも、「報告書」の著者ヤマトフは、参考文献を参照する機会がなかったために、火事が生じた年代については不案内で、正しくは一七一〇年であるところを一六六六年としたのであろう。

橘耕斎はこの話を次のように終えている。

「日本政府は前記の事件に付きキリスト教のせいにしてしているわけではなく、私がたまたま見た諸寺の書附では、事件はキリスト教の妖術と名付けられていた。とはいえ、しかし、一六八九年、前記の事件の後、日本のキリスト教は、天草島の一揆の後より、はるかに厳しく迫害されるようになった」⁴¹⁾。

さらに橘耕斎はキリスト教徒の三つの処刑について伝えている。

(一)キリスト教徒は見せしめのために人の多い場所に両手を縛られ、首に板をはめられてさらされた。板の長さ(この言葉は「カンガ」と転写されているが、漢字表記は確定できなかった)は二・二五アルシム【一アルシムは七二cm】、幅は一・二五アルシム、厚さは二ヴェルシヨーク【一ヴェルシヨークは四・五cm】。キリスト教徒であると暴露された罪人は、みせしめのために、三日間(朝から午後まで【朝五つ時から夕七つ時】)物見高い公衆の面前にさらされた。ヤマトフはこの種の刑罰をさらしと名付けられていると言っている(漢字では曝あるいは晒と書く)。

(二)捕縛されたキリスト教徒は(首には板はなし)鞍を置かれた馬に縛り付けられて第四日に市中を引き廻される。武士一人と鎗を手にした数人の警護隊員が付き添う。一行の前には紙に書かれた罪状(日本語では紙幟と名付けられているが、ヤマトフはこの名を挙げていない)が運ばれる。それには、罪人の名前、年齢、生まれた場所が書かれる。この刑罰はヤマトフの言葉ではひきまわしという(漢字では引回しあるいは引廻しと書く)。

(三)キリスト教と罪証された罪人はその後「街外に引き出され、上方に横木をさした柱に縛り付けられ、両側から数回鎗で突かれ、死体は三日間、ぶら下げたままさらされる」が、これは他の町の者たちを脅すためである。「これははりつけと呼ばれる」。現在のポリヴァノフ式の転写では、xapnyka [kharitsuke]と書くが「報告書」は書き方が違う(「xapnyka [kharitsuke]」と書かれている)。漢字では磔と書く。十字架にはりつけられる形をとるこの刑罰は、日本語では、磔刑(たっけい)と読むとも呼ばれる。

捕まったキリスト教徒の親族もまた訴追された。捕まったキリスト教徒の最も近い親族、つまり、父母、兄弟、姉妹、子は、キリスト教徒の処刑の日、牢獄の中で斬首される。更に、その頭は「罪人」処刑の場所

に運ばれ、「それぞれの耳に穴を開けて板に」釘で留められ、「板の上に並べて」さらされた。「耳は頭の両側に」並べたが、これを「獄門(rokymon) [gokumom]」⁽⁴²⁾と言う。ヤマトフが示した転写は間違っている。最後の文字は「m」ではなく「n」と綴り【実際にはrokymon [gokumom]と転写すべきである。日本語の「獄門」は文字通りの意味では、牢獄の門、あるいは、単に牢獄を意味する。この歴史的コンテキストでは、罪人の頭をさらすことである。

死刑になった犯罪人の首を監獄の門のところに並べて人目にさらすという伝統が生まれたのは、少なくとも平安時代中期以降で、それと共に「獄門」という言葉が出来た。このやり方はそれ以後の鎌倉時代、室町時代、江戸時代に引き継がれた。徳川幕府の時代になってからは、死刑になった犯罪人の首は監獄内の刑場から、三日二晩見せ物とし、みせしめとするために浅草小塚原と品川鈴が森の二箇所に運ばれていた。ヤマトフは次のように記している。

「以前は、同様なやり方で、罪人の親戚縁者も、罪人と共に犯罪に加わったのかそうでないのかとは無関係に、常に処罰されていた。その後になつて、もし罪人が親戚縁者と一緒に住んでいなくて、家から離れて三年後にキリスト教を受容した場合は、罪人の親戚縁者は処罰対象にはならなくなつた。罪人の出身地の村役人(長およびその補助者)は差し押さえ処分を受けるが、もし彼ら自身が罪人を発見できずそのことをお上に報告しない、あるいは罪人が別の場所で発見されるようなことがあれば、その場合は名主およびその補助者は斬首の処罰を受ける。これは首罪(Cy3aai)と呼ばれる⁽⁴³⁾。Cy3aai [Suzzaj] とらう語の正しい転写はCio3zai [Suzzaj]。同意語らう斬罪(D3anz3ai [Dzandzaj])も。

ヤマトフの言うところに従えば、一六八二年に將軍は、キリスト教入信者を密告した者に対する褒美金についての法令を出した。これに関す

る触れは、幕府の命令が読みやすいように目の高さの位置に棹に取り付けられた特別な板に書かれ、全国津々浦々人が多く集まる場所に設置された。この板は「立札」と呼ばれた。日本では住民への通告にこのやり方が古来用いられていた。徳川時代には、日本列島におけるキリスト教普及の禁止に関するこのような触書は「切支丹札」と呼ばれ、「五札」の一つに数えられ、「大高札」とも呼ばれていた。

同様に、ヤマトフは、次のように伝えている。

「二六八二年、すべての村々、町々に、幕府の触れが出された。誰かがキリスト教に帰依したことを訴え出た者は褒美を取らせる、との内容だった。

触れは、板に書かれ、以下の内容だった。

一、吉利支丹宗門はすでに累年ご禁制であったが、不審なるものあれば、申し出る者すべてに、御褒美として、

ばてれんの訴人 一五〇〇いちぶ (六〇〇ループル)⁽⁴⁴⁾

いるまんの訴人 九〇〇いちぶ (三六〇ループル)

立ち返り者の訴人 九〇〇いちぶ (三六〇ループル)

上記の通りくださるべし。

たとえ、切支丹宗門と同宿の者といえども【あるいは「同宿并宗門」の誤伝達か】、この宗旨に加わらず、宗門の規則の詳細を申し述べた者は、同様に、褒美をくださるべし、すなわち一五〇〇いちぶ (六〇〇ループル)。かつては、自身が切支丹宗門といえども、その教えを棄て、仲間を申し出た者も同然の褒美を下さるべし。

現在までのところにおいて、キリスト教徒の発見のために、ひとつの

屋敷に住んでいる四〇家族からなる特別役所がある。

この役所の設立時期は私は知らないし、どこかで読んだこともない⁽⁴⁵⁾【上記引用文に関して】キリスト教事案に従事した役所には四〇家族が住んでいたとこのことをヤマトフは確実に知っていたのではないかとの疑いが生じる。いずれにせよ、その役所が造られた時期を知らないことやマトフは正直に言っている。それはいくつかの名前を持っていた。切支丹屋敷（キリスト教【徒を収容した】家）の意味）、山屋敷（「山の家」の意味）と言う名で、江戸小石川小日向（今日の東京都文京区）にあった。この場所には井上筑後守の私邸があった。一六四三年（寛永二〇年）、この屋敷は取調所（「キリスト教徒と疑われた者たちの」尋問所）の意味）となり、一六四六年には籠舎（牢獄の意味）に転用され、それは一七九二年（寛政四年）まで存続した。

「報告書」の最後でヤマトフは、聞いた話としてもう一つの奇跡について次のように記している。

「私（ヴラジミール・ヤマトフ）の弟子に若狭国出身の藩役人のひとりがいた。彼は私に、キリスト教の奇跡という名で知られる彼らの国であったある出来事について語ったことがある。この国の藩主の領地に漁が禁止されている川があった。ある時若い武士がそれを無視して魚を捕り始めた。見張りが彼を掴まえようとした時、その武士は川の中を向こう岸に渡った。見張りが彼を掴まえようと走って橋を渡ったところ、武士は再び川の中を元の岸に渡っていった。同じことが何回か繰り返された。」⁽⁴⁷⁾

その若い武士が起こした奇跡の数々をヤマトフは書き記している。その武士は、山中に住んでいてその後間もなく死んだ老人から奇跡を起こす秘儀を受け継いだという。大名は幕府に、「キリスト教の秘儀」を身に付けた若者が存在することを知らせた。

「大君からの指示が届く前に、その若い武士は、原因は不明だが三階立ての家の屋根から落ち、その際自分の刀が体を貫いてしまった。もしかしたら彼は、山中で老人から受けた秘儀の効き目を試そうとしたのかもしれない。」

ヤマトフが開き語っているキリスト教の魔術は、貫首日樹の場合にせよ、若い武士の場合にせよ、いずれも日本列島でのキリスト教とは関係のない説話というジャンルの話を思わせる。ヤマトフ自身は、これらの情報はすべて公式に書かれたものから取ったと断言しているが、彼の主張は深い疑念を抱かせる。彼は次のように述べている。「前記の日本におけるキリスト教の奇跡についてはすべて、江戸の取調所、藩の取調所および寺々の住職たちのところに保管されている報告書で読んだものである。様々な奇跡に関して多くの著作があるが、これらすべての書物は専ら販売を目的とし人々の興を買うためのもので、信用は出来ないの、それらから私は何も借用することは出来なかった。」⁽⁴⁸⁾

しかしここで生じる疑問は、信任された高位の役人である大名のところに、ましてや、幕府の中央において保管されている文書を閲覧する権利を橋耕斎は得ることが可能であったのであろうか、ということである。おそらく、これらの話題はすべて「販売と人々の興を買う目的で書かれた書物」から借用されたものであろう。しかし、それに対して確実な答えを出すためには、世俗文学、特に説話のジャンルの文学的分析を行い、ヤマトフが言及していると同じ話題を見出すことが必要である。

ヤマトフは「報告書」を次のように締め括っている。

「最初のヨーロッパ船が日本に来たのは一五二二年、豊後国⁽⁴⁹⁾の府内⁽⁵⁰⁾という町で、その時始めて日本はキリスト教というものを知った。しかし、様々な種類の魔術はそれより遙か以前から知られており、忍びの術⁽⁵¹⁾と呼ばれ、この種の魔術は、それを知っている人のみが自分を他の人から見

えなくできるといふものであった。

日本におけるキリスト教については、手元にある書物からは、まず何も知ることはできない。というのは、日本の歴史はすべて言い伝えによって編纂されており、完全に信用しうるものではないからである。本物の著述は、それがあったとしても、日本で七〇〇年近く続いた内乱の間に灰燼に帰した。キリスト教について私が述べたことはすべて、書物からではなく、役所に保管されている文書から借り受けたもので、今私はそれを記憶に従って書いている。更に付け加えなければならないのは、日本のキリスト教徒が書物、聖像画、祈祷のための場所は持っているという話は、日本にいた時におよそ聞いたことがなく、各種の魔術を持っていることが知られているのみで、皆はそれをキリスト教と呼んでいるのである。日本では死者はすべて仏教儀式に従って埋葬されている、従って、現在日本人の間にはキリスト教徒はいないと結論づけることが出来る。」⁽⁵²⁾

最後に、若干の結論を述べることにする。「報告書」の原本は一八枚から成るノートの形をとっているが（ファイル【no】には同一の内容の二冊のノートが保存されている）、おそらく、橋耕斎が話したことを外務省アジア局の書記が手書きで書いたものであろう。そのことは文中に「ヴラジミール・ヤマトフが考えているところによれば」⁽⁵³⁾という直接言及した箇所があることから分かる。オステン・サケン男爵に提出されたこの「報告書」は実際には、キリスト教の普及とその後の迫害と関連づけて徳川幕府の歴史を手短かに述べたものである。「日本におけるキリスト教の歴史」という「報告書」のテーマはおそらく「注文主」から課せられたもので、その「注文主」がオステン・サケン男爵であったことはまず間違いない。そこでヤマトフは様々な出来事をつなげてひとつの話にまとめることとなった。天草島におけるキリスト教徒の蜂起、慶

安年間（一六五一年）の乱、日蓮宗本門寺での僧の論争、世俗権力によるキリスト教徒迫害と処刑方法、「報告書」の中に出てくる人物によって引き起こされた奇跡、ヤマトフがキリスト教の奇跡というよりもむしろ魔術とした出来事、などである。ヤマトフが語った出来事のすべてが、日本列島におけるキリスト教の歴史に直接関係したもので、決してない。原本では漢字は使用されていない。さらにまた、【草稿で】提示された転写は完全には程遠いものである。また、固有名詞は判読が困難で、日本語の発音と合っていないため、地名、人名の確定には少なからぬ労力が要求される。文中で漢字が用いられていないことは、研究者の課題遂行を複雑なものとす。

このことと関連した本稿の筆者の課題のひとつが、キリール文字で書かれた日本語の語を今日使用されている転写法に直すことであった。この転写法はかつてポリヴァノフが提案し、ロシアの学界全体で採用されたものである。⁵⁴⁾ 次の課題は、これらの語を漢字に直し、ヤマトフが語っているところの実際にあつた出来事を確認し、異なった解釈がある場合はそれを指摘し説明を与え、「報告書」の中に出てくる話題について現代の読者のために出来る限り手短なかたちで説明を与えることであつた。一八八八年になつてようやく、V・コストイヨフの『日本史概説』⁵⁵⁾ という本が刊行された。従つてヤマトフの「報告書」は、多くの矛盾を含みながらも、徳川時代の日本の歴史に関する情報源として少なからぬ意義を有していた。ただし、徳川時代の日本に関心を抱いていたのは、ロシア帝国の外務省およびその他の中央機関の限られた範囲の人々であつた。

ある程度の範囲ではあるが、ヤマトフの「報告書」には、著者に強い印象を与えたと思われる出来事（天草でのキリスト教徒の蜂起、慶安の変）、いたことのある場所（例えば日蓮宗本門寺）、そして特定の人物（例

えば、由比正雪、本門寺の貫首・日樹）の名が出てくる。言い換えれば、オステン・サケンに提出された「報告書」を通して、彼の生活体験、履歴に関すること、知的蓄積を伺い知ることができる。ロシアの日本学発展への貢献に対する敬意はさておき（デミドフ賞を授賞した辞書の編纂への参加については言うまでもない）、橘耕斎は、歴史、文化、文学に関する幅広い認識は有していなかった、というのが「報告書」を読み終わった印象である（彼は「報告書」に、例えば『様々な奇跡についての著述』という題名を付けてもよかったであろう）。

●使用文献

1. Бабинцев А.А. Из истории русского японоведения//Японская филология. Ответственные редакторы И.В. Головин и В.С. Гривнин. М.: Изд-во Московского университета, 1968. С. 124-137.
2. Белняк И.Я., Гальперин А.Д., Гришелева Л.Д., Подпалова Г.И., Попов В.А., Топеха П.П., Эйлух Х.Т. Очерки новой истории Японии (1640-1917). М.: Изд-во восточной литературы, 1958. 598 с.
3. Иванова Г.Д. Русские в Японии XIX-начала XX в. Несколько порретов. М.: Наука. Восточная литература, 1993. 170 с.
4. История Японии. В 2-х тт. Т. 1. С древнейших времен до 1868 г. Ответственный редактор А.Е. Жуков. М.: Институт востоковедения РАН, 1998. 660 с.
5. V・Y u・K r i m o f 「一八六二年の遣欧使節団—ロシア帝国外交史料館所蔵史料によつて—」（「日露関係史料をめぐる国際研究集会二〇〇八予稿集」）五四—八九頁。
6. Климов В.Ю. Переход к политике самоизоляции в конце XVI-начале XVII вв. (по указам правителей Японии)//Япония: культурные

традиции в меняющемся социуме. К столетию со дня рождения Е.М. Пинус (1914-1984) СПб.: Изд-во Лема, 2014. С. 152-163.

7. Костялев В. Очерк истории Японии. С.-Петербург. В типографии В. Безобразова и К^о (Вас. Остр., 8 линия, №45). 1888. 448 с.

8. Поливанов Е.Д. О русской транскрипции японских слов/Труды Японского отдела Императорского Общества востоковедения, выпуск I. Пр., 1917. С. 15-36.

9. Русский биографический словарь. Объявляемых-Очкин. Издан под наблюдением председателя ИМПЕРАТОРСКОГО Русского Исторического Общества А.А. Половцова. СПб.:

10. Типография Главного Управления Уделов, Моховая № 40, 1905. 480 с. Северная пчела. Газета политическая и литературная, № 18. Четвергом, 23 января 1858 г. С. 83-88.

11. Соколов А.Р. О приезде в Санкт-Петербург японского посольства в 1862 году А・Р・ソコロフ「一八六二年における日本使節団のテルブルグ来訪について」(「日露関係史料をめぐる国際研究集」二〇〇六予稿集) 四二―七二頁。

12. Энциклопедический словарь. В ХЛІ тт., 82 полутомах. Том ХХІІ. 43-й полутом. Опека-Оутсайдеръ. Издатель: Ф.А. Брокгаузъ (Лейпцигъ), И.А. Ефрон (С.-Петербург). СПб.: Типо-литография И.А. Ефрона. Прагматичный пер., № 6, 1897. 480 с.

13. 中村喜和「橋耕斎伝」『一橋論叢 第六十三卷第四号』『 Сборник статей [университета] Хитогулубаси). 63-й том, № 4, Токио, 一九七〇年, 五一―五四〇頁。

14. 日本大百科全書『小学館スーパー・ニッポニカ』“Super Nipponi-sa CD ROM” (4 CD ROM) / 小学館 一九九八年

(翻訳: 有泉和子) 【 】は訳注。

【註】
(1) ロシア語表記・ローマ字表記とも日本語の長音は「ロロン」を用い「…」と記す。

(2) 上の手記はロシア国立歴史文書館 (РГИА) の「Ф.473, оп.3, дело 326, лл. 6-8 об」に保管され、上の手記の大部分は「アレクサンドル・ロスチスラヴィイチ・ソコロフの論文「一八六二年における日本使節団のベテルブルグ来訪について」(「日露関係史料をめぐる国際研究集会二〇〇六予稿集」東京、二〇〇六年、四六―四七頁、六二―六三頁)に批判分析はせずに書かれる。クリモフはヤマトフの最初の手記のいくつかの点に關し、批判を試みた(V・Yロ・クリモフ「一八六二年の遣欧使節団―ロシア帝国外交史料館所蔵史料によつて―」『日露関係史料をめぐる国際研究集会二〇〇八予稿集』東京、二〇〇八年) 六〇―六一頁、七八―七九頁)。

(3) РГАДА. Фонд 1385, опись 1, ед. хр. 920. Л. 1.

(4) 中村喜和「橋耕斎伝」『一橋論叢』第六十三卷第四号【二三八―一六四頁】、「『一橋論叢第六三卷』の』五一―四頁【一五四〇頁】、一九七〇年。【『大日本人名辞書』および中村論文を要参照】

(5) Иванова Г.Д. Русские в Японии XIX-начала XX в. Несколько портретов. М.: Наука. Восточная литература. 1993. С. 28. Бабинцев А.А. Из истории русского японоведения//Японская филология. М., 1968. С. 124-125.

(6) 中村喜和上掲書五二―五二五頁。

(7) 『和魯通言比考』(Японо-русский словарь) составленный И. Голшкевичем при пособии Ташибана-но Коосай”. СПб., 1857.

(8) Северная пчела. Газета политическая и литературная, № 18. Четвергом, 23 января 1858 г. С. 84.

(9) Иванова Г.Д. Указ. соч. С. 143. Бабинцев А.А. Указ. соч. С. 124-125.

- (10) 最近ロシアの歴史学では「ドイツの影響」、すなわちドイツ系の貴族、より正確には、ロシア社会のエリート層に入っていたドイツ系貴族に對し、より多くの注意が向けられるようになった。その例として、興味深い著書 (Копелев Д.Н. На службе Империи. Немцы и Российский флот в первой половине XIX века. СПб.: Издательство Европейского университета в Санкт-Петербурге. 2010. 338 с. [D.N. Koplev, 『帝国に奉じ』 一九世紀前半におけるドイツ人とロシア海軍』, サントクト・ペテルブルグ, ヨーロッパ大学出版会, 二〇一〇年, 全三三八頁)、『おまじ今年に発行された一般向けの論文がある (Наум Синдлаговский. Немские страницы русской истории в петербургском городском фольклоре//Нева, № 2, 2017. СПб., 2017. С. 182-202).
- (11) Русский биографический словарь. Обезьянинов-Очкин. Издан под наблюдением председателя ИМПЕРАТОРСКОГО Русского Исторического Общества А.А. Половцова. СПб.: Типография Главного Управления Углев, Моховая № 40, 1905. С. 400-401.
- (12) “Известия Императорского Русского Географического Общества”, 1866.
- (13) Известия Императорского Русского Географического общества, 1869.
- (14) Энциклопедический словарь. Том XXII. 43-й полутом. Опека-Оутсайдер. Издатель: Ф.А. Брокгауз (Лейпциг), И.А. Ефрон (С.-Петербург). СПб.: Типо-литография И.А. Ефрона, Печатный пер., № 6, 1897. С. 335.
- (15) Норденшельд А.Э. Шведская полярная экспедиция 1878-79 гг.: Открытие сев.-вост. прохода: С прил. Отчета капитана Иоганнесена о плавании его от устья Лены до Якутска и карт мыса Челюскина, порта Диксона и Таймарк. пролива. СПб.: А. Траншель, 1880. 207 с.
Норденшельд А.Э. Экспедиции к устьям Енисея 1875 и 1876 годов: Со статьею адъютант проф. зоологии Угвал. ун-та Г. Тэли о плавании его по Енисею в 1876 г. и 2 карт. плавания. СПб.: А. Траншель, 1880. 198 с.
- (16) РГАДА. Фонд 1385, опись 1, ед. хр. 920. Л. 2.
- (17) РГАДА. Фонд 1385, опись 1, ед. хр. 920. Л. 2-206.
- (18) Там же. Лл. 2 об. -3.
- (19) Там же. Лл. 3-3 об.
- (20) Там же. Лл. 3 об. -4.
- (21) この法令のロシア語訳は以下の拙論を参照のこと。Климов В.Ю. Переход к политике самоизоляции в конце XVI-начале XVII вв. (по указам правителей Японии)//Япония: культурные традиции в меняющемся социуме. К столетию со дня рождения Е.М. Пинус (1914-1984). СПб.: Изд-во Дева, 2014. С. 161.
- (22) РГАДА. Фонд 1385, опись 1, ед. хр. 920. Лл. 4-4 об.
- (23) 報告書にある「Kishu (Kishu)」は今日一般に受け入れられている表記では「Kisju」と読むべきである。紀州とは紀州藩のことと思われる。徳川家の所領である紀伊国と一部伊勢国にかかる (今日の和歌山県と一部三重県)。この所領は二六一九年徳川家初代將軍家康の第十子である徳川頼宣 (一六〇二—一六七二) に引き渡され、頼宣が初代の領主になった。徳川頼宣は、もし、直系の子孫が途切れた場合に將軍になる資格を有する、御三家と呼ばれる三つの家の男子のひとりとなった。この御三家とは、紀州藩 (紀州の大名)、水戸藩 (今日の茨城県の一部である水戸の大名)、尾張藩 (今日の愛知県の一部である尾張の大名) で、將軍とは親族で近い関係にあり (親藩)、国家の政治的特権層を構成していた。
- (24) 駿河とは地方の名前で、今日の静岡県の中央部分に当たる。報告書にある府中 (Фучуу [Fuchuu]) は「Футю [Futju:]」と読むべきである。府中とは、駿府、すなわち今日の静岡市にある行政地区と思われる。静岡市とは静岡県の県庁所在地。
- (25) РГАДА. Фонд 1385, опись 1, ед. хр. 920. Лл. 5 об. -6 об.
- (26) 日本大百科全書「小学館スーパー・ニッポニカ」“Super Nipponica CD ROM” (4 CD ROM) 一九九八、小学館。
- (27) 由比正雪は江戸に上った後、伝説的人物・楠木正成 (一二九四—一三三六) の子孫である楠木不伝が主催する楠木流軍学塾を選んだ。由比正雪は楠木不伝の養子になった。一六三三年由比正雪は養父を毒殺し、塾長になったと言われている。塾には三〇〇〇名が在籍していたが、そこには、將軍の直臣 (旗本)、たくさんの大名の家臣、浪人がいた。

- (28) 上の二つの作品名をロシア語に翻訳するものは本稿筆者には現在困難。
- (29) РГАДА. Фонд 1385, опись 1, ед. хр. 920. Дл. 6 об. -7.
- (30) История Японии. В 2-х тт. Т. 1. С древнейших времен до 1868 г. Ответственный редактор А.Е. Жуков. М.: Институт востоковедения РАН, 1998. С. 437.
- (31) 一八八五—一八九〇年 V. J. a. コストイリョフは駐日ロシア領事の任にあった。上掲の書物の他に、次ぎの著作を上梓した。「К войне России с Японией. История японского народа». СПб, 1904. 52 с. и составил «Русско-японский словарь разговорного языка». СПб., 1914. 1007 с.
- (32) Костылев В. Очерк истории Японии. С.-Петербург: В типографии В. Безобразова и Ко (Вас. Остр., 8 линия, №45). 1888. С. 358-359.
- (33) РГАДА. Фонд 1385, опись 1, ед. хр. 920. Дл. 8.
- (34) РГАДА. Фонд 1385, опись 1, ед. хр. 920. Дл. 8 об. -9.
- (35) Беник И.Я., Гальперин А.Д., Гришелева Л.Д., Подпалова Г.И., Попов В.А., Топеха П.П., Эйлуэ Х.Т. Очерки новой истории Японии (1640-1917). М.: Изд-во восточной литературы, 1958. С. 43. 上の共同論文から引用した当該部分の筆者はАлександром Львовичем Гальперином (1886-1960) である。
- (36) РГАДА. Фонд 1385, опись 1, ед. хр. 920. Дл. 10.
- (37) 上の、日蓮の六人の弟子、六老僧を挙げておる。 (一) 日照 (一二二二—一二三三)。(二) 日朗 (一二四四—一二五五)。(三) 日興 (一二四六—一二五七)。(四) 日向 (一二五八—一二六九)。(五) 日頂 (一二七〇—一二八一)。(六) 日時 (一二八二—一二九三)。日蓮の弟子たち、日蓮宗派の有力な者は皆、僧名の中に、漢字「日」(太陽の意味)の字があることが判る。
- (38) 日樹は一六三二年に死去している。すなわち、上のに叙述された火事の遙か前である。火事が起きたのを一七一〇年ではなく、ヤマトフが語っているように一六六六年ととつてもである。しかしこの件に関する詮議は、まさしく、日樹の時に起きている。
- (39) 現在池上本門寺は東京都大田区池上にある。
- (40) 中村喜和上掲書五一七頁。
- (41) РГАДА. Фонд 1385, опись 1, ед. хр. 920. Дл. 10 об. -11.
- (42) РГАДА. Фонд 1385, опись 1, ед. хр. 920. Дл. 11-12.
- (43) Там же. Дл. 12-12 об.
- (44) 一分、一分金とは、金貨である小判一両の四分の一に当たる。一分小判、小粒、あるいは単に一分と様々な名で呼ばれていた。金貨の小判の改铸とともに、一分金も改铸され流通した。一六〇一年から一八六〇年まで一回改铸された。金の割合は減らされた。一八三七年(天保八年)、一分金と並んで、銀貨で一分銀と名付けられたものも流通するようになる。
- (45) РГАДА. Фонд 1385, опись 1, ед. хр. 920. Дл. 12 об. -13.
- (46) 橘耕斎は若狭国を「округ Вакаса」と記しているが「округ」ではなく。「Провинция Вакаса」とすべきである。「報告書」が作成された当時、専門語をロシア語に訳するのは定式化されていなかった。
- (47) РГАДА. Фонд 1385, опись 1, ед. хр. 920. Дл. 14-14 об.
- (48) РГАДА. Фонд 1385, опись 1, ед. хр. 920. Дл. 16-16 об.
- (49) 豊後国とは今日の九州大分県の大部分にあたる。
- (50) 府内とは今日の大分市の古称で、大分県の行政中心地。
- (51) 忍びの術とは密かに変身する術である。上の術を完璧に身につけたのが忍者である。忍者とは、先進的な戦闘術、高度な諜報訓練、実戦行動を秘密裏に行う技術を身に付けた人たちのことである。
- (52) РГАДА. Фонд 1385, опись 1, ед. хр. 920. Дл. 17-17 об.
- (53) РГАДА. Фонд 1385, опись 1, ед. хр. 920. Дл. 4 об.
- (54) Попианов Е.Д. О русской транскрипции японских слов/Группы Японского отдела Императорского Общества востоковедения, выпуск 1. Пг., 1917. С. 15-36.
- (55) Костылев В. Очерк истории Японии. С.-Петербург: В типографии В. Безобразова и Ко (Вас. Остр., 8 линия, № 45). 1888. 448 с.